

ウエレーとロイン

エ、コツク

アメリカに生れても、流車も電車もまだ知らなかつた子だち、今頃はどんな悪戯をして居るだらうか。思へば丁度去年の今日だつた。四半人前位なコツクの技を賣りて、カラペラス郡の片田舎に引ッこんだのである。王府より流車六時間の、驛馬にて山深く進むこと五時間あまり、フオアスクロツセングといふ孤村がある。孤村と云ふても形容が勝つて居る。人家は僅か三軒あるばかりだったのである。

暮れてから三哩ほど車にゆられたので、寒さは身に泌みてゐたが、田舎酒屋のストーブ温かく、椅子に身を下ろした時はまことに心持であつた。薄暗きランプの下に、二つばかりの孫と覺ほしきを抱へて、白髪白髯の老人は坐して居る。その隣れる椅子によりかゝりたるまゝ抱き合ひて眠つてゐる二人の男の子があつた。これがウエレーとロインであつたのである。實は馬丁の奴め、こ

ゝで一杯をきこしめさんとして、下ろしたのだナアと考へてゐた。まだ四五哩の夜路をガタゴトとすゝみゆくことかと思ふてゐたが、老人の言葉にこゝが所謂任地であることがわかり、流石の大膽大夫も自分の迂闊を嘲笑らつた。やがて老主婦も出で、色々話に花が咲いひて、彌々明日からこの家の庖厨をおづかることゝなつた。

主人は三十幾年間小學教師であつたが、職を辭してこの山里に隠れてから十余年息子たちはそれぞれ職を得て他村に住居し、今はこの家には老夫婦と末の娘だけ残つて居るとのこと、その娘も王府の寶石商に働いて居るので廣きこの家はいつも淋くかつたとのこと、田舎人の飾なく故き友にかたるやうに打ちつけて話をしてくるゝ。末の息子は野一つ隔てたるところに家をもつて居たが、この頃嫁女は親里へ遊びにいつたので、その歸りまゝで、二男一女と共にこの家に同居してゐると云ふわけ、夢の中なるウエレーとロインは、かくて余に紹介せられたのである。ウエレーは六才。ロインは四才。

ウエレーは母に似たさうで、面長に美しき子で、額の廣い口もとの締りたる、争ふべからざるアン  
グロサクソンのタイプである。眼の碧く窪みたる  
と、鼻の巧みに高まりたるとは云ふまでもない。  
ロインは圓顔の福々しく、手足も太く短かいと評  
すべき方で、笑ふ時は一寸と口を歪めるあたり、  
見るからに横着な腕白さんの相を具へてゐる。ウ  
エレーはつねねりむつりて、口數もすくなく、一  
週間ばかりは余にも余り親しまなかつたが、ロイ  
ンは噤舌の剽輕もので、あくる日より余に抱きつ  
いて、ものねだりするやうになつた。唯一つ困る  
のは、ロインの英語は幼年世界のものであつて、  
家人の外には一寸と通用むつかしく、二三日のう  
ちはあて推諒で間に合はしてゐた。

自由わがまゝのアメリカにも長者を敬ふと云ふ禮  
儀は存在してゐる。子どもは雇人に對しても敬語  
を用ゐる。そして雇人は子どもを呼びすてにする  
元よりこの國の雇主と労働者との關係は、主従と  
云ふ風の臭味をもつて居らぬのであるから當然の  
ことであるが、乳母や下婢などを呼びすてにして

威張りちらした自分の昔に引きくらべて、うら恥  
かしい想する。悔しいがこの点に於てアメリカが  
勝つて居ると云はねばならぬ。

ウエレーもロインも、どんな不機嫌なときでも、  
よしや泣きながらでも、朝夕の御挨拶を欠いたこ  
とはない。何かものを頼むにどうぞと云ふことを  
添へなかつたら、誰れも子たちを助けぬと云ふ習  
慣、そしてなるべくはすべてのこと人手を借らぬ  
やうに癖つける。アングル、サム、血潮はこゝい  
らから活々しくなるのであらふ。二人は一つの室  
に眠つてゐる。熱のある時か、胃腸でも悪くした  
時は格別、平生は二人だけに一室の主人ぶりか  
ひがひしく、燭燭を消し、窓かけを閉して、もの  
静かに眠るのである。小學校へゆくやうになつて  
も、母様に添臥してゐる吾國の子だちにくらべて  
は、可憐のやうであるが、乳兒の時からの習慣で  
あるし、寢具も室の構造も、極めて衛生的にでき  
てゐる故、夜半の注意まで、父母を煩はす必要が  
ないであらふ。夜一と夜父母と離れてゐるため、  
朝の接吻は一としは濃かなる愛情を味はしむるか

もしれぬ。

神經質なるウエレーは何日も早起である。ロインはどうかすると朝食のすむまでも眠つてゐることがある。ウエレーでもまだ一人では身じまひ出来ぬ。ましてやロインなど衣服を着更ゆる時は、家内の一問題となる。寝まきはシャツとツボンとをくつつけたもので、フランネルでこしらへてゐる。胸はボタンで開いてゐるばかりだから、先づ兩足を先に通して、それから、越後獅子的に据まりて兩手を通すのである。寢臺の敷布團は并の毛屑綿屑製であるが、その上に鷺鳥の羽毛でふくよかな敷布團を用ゐてゐる。その上に日本流の敷布團をしつらひ上布で敷ふてその上ねるのである。かけ布團は毛布二枚ばかりと布團二枚、これをやはり上布でつつみ、上被の眞白さにて飾りふうわりとかける。枕は鷺鳥の羽毛をつめ、白布で更らに上袋を造つてある。二人の起きてくる頃は、酒店の方のストープが盛んに炎をてゐるので、ねまきのまゝ、その椅子に出張する。老人はとうに一方に坐して、眼鏡でしに二人を見つめニヤニヤ笑

つてゐる。ロインはそろそろ文句を云ひはじめウエレーはそばのテーブルから自分の着物を撰みだしてゐる。老夫人もでてきて、孫たちの世話をす。肌着は上下二つになつて、下の方は膝ざりで切れてゐるが、上下たをゴムの帯で釣るやうにしてゐる。この釣りかたがむつかしい、余り緊りても心地あしくざりとてゆるきは尙更いけぬ。ロインの文句は中々むつかしい。どうかすると祖父父母のやるのがどうしても氣に入らず、庖厨にかけこんでくることがある。だが吾手で氣に入ることもあるし、氣に入らぬこともある。最後は父のところによく。父のチャレーはお百姓である。鼻聲の文句をだまつて聞いては居らぬ。だまれの一喝で大低へこまして仕舞ふ。ロインの文句は父のもとにゆきては、最終となる。長き靴下をはかせ、腰のところのボタンとゴム帯にて連結する。肌着案が甘く通過しても靴下案が物議を起すこともあるかくてオパーンシャツを着せ、半ツボンをはかせ靴の紐かたく結び、コートを羽織らせ、漸く出来あがるのである。天氣のいゝ時はこの外にカ

「キー色の股引を上にはかせ、肩から釣つてやる。この股引は胸あてし連続してゐる。酒屋さんの武装ができたのちは、河原にねころんで泥まみれにならふと、草薙をかきわけて探險をしやうと、勝手次第、寝るまではその武装を解くことがないのである。

顔を洗ふのは二人とも自身にやる、ことにウエレは巧みなものだ、水架に手が届かぬ故、椅子の上には洗面盥を置き、手から顔からシャボンをつけて隈なし淨め、髪をぬらして手つから巧者に櫛を入れる。二人とも黄金色髪だ上まことに柔かなる毛だから奇麗に波をつくつて両方にわけられる。ウエレは鏡を見て首を上下左右に動かし髪を梳りてゐる。ロインはシャボンの泡を眉にくつつけて鼻の先ばかり舐りに拭ふてゐる。ウエレは平生でもどうかする拍子に頭に手でも障ると髪がわるくなるとして大心配する子だ、桃割れの鬘をうしる手にいちづつてゐる日の本のみいちやんやあちやんのやうだ、日本の熟語の所謂ビューテブル書生さんがコスメチックに苦心慘愴するもかくまでは

と思はるゝほどである。一度ロインに耳のうしろも洗ふやうに言ひつけたら毎日耳のうしろにはかりシャボンをつけて、これでいゝかと聞きにくるには閉口した、これが御縁となりてロインの髪はいつも余が手にわけらるゝことゝなつた。

食卓に就くとき、ロインとウエレと決して并ばせてはいけぬ。横むきとなりてナイフと肉叉にて決闘の眞似をするからだ。子たちの皿もカップも小さな可愛らしいのが出来てゐるが、ロインはこの半人前あつかへされるのが不平でたまらぬ。時には小さな皿ではイヤダと力みだすこともある、二人とも乳粥は大好物、ミルクをたつぶりかけお砂糖を自分で入れてゆつくりたべるのだ、祖父さんであれ祖母さんであれこのお砂糖に干渉すると怒つて仕舞ふ、胃を害しやしないかと危ぶまるゝ事もあつた、砂糖が過ぎるとだべされなくなつてすぐ飽きてくるから自然の要求としてそれれ自分で加減してミルクの味を損ぜぬやうにして居る。その次に彼等のすきなものはハツトケ！キである。日本の龜の子焼のやうなものに楓蜜をかけて

食するのだ。ロインはまだナイフを自由に扱ひするわけにゆかぬ。傍に居る人誰か小さく切りて與へる、ウエレーは小さく焼いたのを好む、これも細かに切るには一寸面倒だからであらふ、子供には珈琲は害ありて益ないのだからなるべく飲ましたくないが、外の人々が飲むので、我も我もとの請求、いたしかたないから薄くしてミルクを加へ誤魔化してやる、ロインの如きはお茶を加へたのも色さへつけば珈琲だと思ふて飲んでゐる。最初の一月は雨季のうちであつたから二人とも外出できず、應接の間兼帯になつてゐる、例の酒店には悪戯をし喧嘩をはしめて長泣をして皆んなに呆れらるゝを日課としてゐた、音がなと思ふてゐると揺椅子の上で居眠りをしてゐる、老人は口癖のやうにルーソーのエミールを振り廻す、子どもは野蠻人のやうなものだ、野蠻から文明にすゝむ一時期を一生のうちたいみで納めてゐるのだ、喧嘩するのも本然たか悪戯も自然だ、干渉するな罰するな、開發だ誘導だ、この外何等の妙手段があらふと常に云ふてゐる、かくても眼に余る

時がある、と赫と怒つて横ツラをなぐつて仕舞ふ時がある、二人の喧嘩するのが面白い、日本の兒だちのやうに組打したり、髪をつかみ合ふたりすることは殆んどない、拳を動かして突き合ふ位のものだ、よろけてみて倒れさうになつた時は敗けたのである、ウエレーは聲を立て、泣くことは稀であるが、一二時間もすゝり泣をした上、半日位不機嫌である、ロインは雷が戸まといひしたやうにうろたへた泣きやうをする、誰れがなだめても中々聞かばこそ、ありあふ物を投げつける、地團太をふむ、殆んど手のつけやうもないが、それもホンの一時のこと、何かのはづみにピツタリ泣きやみ、ニコニコしてゐることもある。三週間ばかりして彼等の母は歸つてきた、乳兒までも姑に托して五週間とか遊んできたとか、アメリカのお嫁さんは暢氣なもんだ。母の歸ると共に彼等の學科は始まつた、毎朝食後三十分ばかりであるが、ソレはソレは嚴格なものだ、レッスンと云ふことが家庭で一種の威嚴をもつてゐる、どんな用事があつてもそれがすむまで

は誰れも傍にゆかれぬ、ウエレーのためには讀本の讀方と書取の時には二十以下の算へかた位のもの、書き方を課して批評し獎勵する時もある、ロインのレッスンは母の膝に抱かれ母の口を見て口まねをするたけだ、Lの舌は齒の間から一寸と顔だしてうしろにひっこみ、Rの舌はあでにとりまゝりて唇を突きだすなど視話法のいろ／＼かくて無心のうちに習ひゆくのである、梅花の魁に春の幕開かれて野の艸は舞臺のカーペット鮮かに雲雀も駒鳥も新曲を奏するに忙はしい、再親愛なる野蠻人君は學科の畢るをまちかねて、戶外にあこがるやうになつた、家のうしろは廣き果樹園である續きたる野には牧場ありて一群の牛は小冠者來れと吼えてゐる、招げばかけよりに小さな手を舐りゆく羊も居る、蝶を追ふて牧草の野をゆけば日ごとくに殖へゆく花のいろ／＼、どこまでゆきても興が盡さぬ、おつかさんがソプラノの引聲にて書齋を報ずるまで歸つてくることはないやうになつた老先生は得意になつてエミールを説いてゐる、ホームには喧嘩もない、泣き聲もない。

戶外に出るには二人とも必ず帽子をいたゞく。忘れてもキャップなしにかけたすことはない、用意周到、キャップはいつとも入口の釘にかけられてゐる、父の命によりて二人とも鶏卵を集める役となつた、百に近き家鶏はその産卵の場所もあちこちと隔つて居る、時には氣まぐれの牝鶏が人目にかゝらぬ叢の中や榎根などに産み落し、その座で鳴いては發覺すると思ふてか、大急ぎで納屋に歸りそこにて鳴いてゐることもある、二人の探險者は果樹園のあらん限りを探索して、この隠れたる寶を得た時は父にもあれ祖母にもあれ賣りつけることが出来るのだ、好箇の運動法であつて、都會の子たちの夢想し得ざる幸福である、集めたる卵を庖厨に納め、かくれたる寶を賣りつけたのち、コツクさん何か下さいとの鼻聲を聞かせぬことはない、この國の習慣として主婦と雖コツクに斷りなしには庖厨から何ももちだすことは出来ぬ、飢ゑたるものは食を撰ばず、昔はハイヤケーキにも時には難くせをつけたものが、今日この頃はプレート一片にバターをなすりつけても欣喜雀躍して舌

鰯を打つて居る、二人のエミールは天與の健康を得て居るのだ、百萬の富を傾けるも購ひ得ぬ幸福を得て居る、羨しいではないか。

家鶏と雖一社會をつくつて居る以上はさうさう馬鹿正直に卵を取りあげられては居らぬ、時にはストライキを起して十數羽の翼ばたさずまじく二人を追ひかけるともある、七羽鳥と云ふ野次馬がこれに附加雷同して怪しげな叫びの聲援をなし、

流石の腕白將軍も旗を巻いて逃げてくることもある、かゝる時は二三の忠犬ありて、よく防ぎよく戦ひ逆襲の勝を制することもある。

耶穌復活祭の慣はしとして美しく彩りたる卵を贈答する、祖母さんの趣向で三ダース位の卵を煮その殻に水書を寫しつけ、子だちの知らぬ間に果樹園の草原に散布して置いた折しも林檎の花の咲きはこりたることゝて喜び勇んでその彩りたる卵を拾ふ二人は名書に魂ありてエンゼルの飛びだし

たようであつた。  
土曜には余と老婦人と彼等の母と三人にて明日のケーキをつくり、パイを焼くなど忙はしい、エン

ゼルもその香に浮れて狭き庖厨に邪魔をすることがある、ロインに至りては焼きあがるまで待つて居られぬ、チョコレートのスパンを管めるやら、ミンスパイの原料を摘むやら、下界の不行儀のあらん限りをつくして、エデンの樂園へ逃げてゆくこともある。

果樹園の花も大かた散りて青梅を窺ふ竿のあぶなげなる頃は彼等もそのホームに歸つてゐたのだ、されど野一つ隔てたるばかり故寢食の外は依然としてわが家のウエレーである、わが家のロインである、庖厨には來ること少くなつたが、献立をきいて形勢優れたりと思へばこちらの食卓に坐りこ

んでゐることもある、わが家は田舎のホタルである、三日に一度位は午餐の客もあるわけだ、老婦人が丹精の菓物など去年密漬せるを穴庫よりとりだして櫻實の紅、覆盆子の濃紫、卓上に花と置か

辭するところにあらず、ステーキなどは余り多く食し得ざるもスチユーのようなものなど、大人の婦人などよりも多く平げることがある、思ふに父の衣鉢を傳へてよく働いて飽くことしらぬと云ふ未來の良農はウエレーにあらずしてロインであらう。

夏の休みに伯母さんが歸つてきた、王府にゐる末の娘のことである、芳紀十八、やさしい言葉のうちにとことなく都ぶりのらうたけたる處がほの見える、二人は歡呼してこれを迎へた、ロインは伯母さんよりもそのもたらせるキャンデーを歡迎したのではあるまいか、娘の學友だちも尋ね來り、二人の従妹の少女もその母と共に二三日逗留した戸外は暑さはげしいので一同日かげの樹の下や、廊下などに椅子をうつしてものがたりしてゐる、従妹の少女もわが二人の村童も漆車さへ電車さへ見たことがない、ましてや都の子たちの第一にも眞似する自動車は想ひもつかぬわけだ、箱にのりて綱をひつばらせ、驛馬の眞似をしてゐる、ロインは馬になつてウエレーは御者、客の小女性は

顧客となつてゐる、グラスとさげびて馬を走らせ、ホアと怒なりて馬をといめ、酒店にゆきて麥酒を呑む眞似をなし一同を笑はせた。

五ヶ月目に余は此山里を去つたのであるが、その後處々を流浪してのち。一年ぶりで再びオーランドに歸つてきた、年一ツ殖えたウエレーとロインは今年も驛馬の眞似をして居るであらふか、窓前の揚柳は孤村の去年に似て嫩芽針の如く春まさに三分、都大路に笑ひ興する手たちの聲もさこゆる、うち見れば何れもあどけなきさうるはしき子たちであるが、吾には見もしらぬ子だちばかり、ア、わがウエレーわがロイン遇ひたや唯一と目。(三月二十日オーランドにて)

